障がい者アート常設展示

いわき市役所　4/10㈮

＼障がい者の夢を咲かせる／

本庁舎1階ロビーで、障がい者によるアート作品の常設展示が始まりました。初日には除幕式が行われ、市長はじっくり鑑賞し「情熱的で、心の底から湧き出る力を感じる作品」と語りました。

この展示は、障がい者への理解促進と、障がい者自身の生きがい創出を狙いにした取り組みで、障がい者の表現活動を支援する「NPO法人はなのころ」による作品の貸し出しにより実現しました。

展示作品は、今後３か月ごとに掛け替え予定です。

「未来ビジョン」ワークショップ

市内各所　5/16㈯

＼いわきの未来を想像し願いを込める／

市では、今年10月にいわき市が誕生し60年という節目を迎えることから、40年後の市制100周年を見据えた「未来ビジョン」の策定を進めています。

本ビジョンに市民の皆さんの声を反映させるため、５月16日から、市内各所にてワークショップを開催しています。

世代を超えた対話の中で、自分たちが住むまちの魅力や将来像について真っ直ぐな願いが語られました。本ビジョンは今年10月に策定予定です。

写真が語る「いわき」の歴史　交易から漁港へ、中之作港

いわき地域学會　小宅幸一

中之作港の沖には暗礁が点在し船の航行には不便でしたが、港そのものは溺れ谷状で容易に船の出入りができました。

江戸時代後期の磐城平藩では年貢米の積み出しは領内の中之作に集中し、御陣屋が置かれるほどでした。ほかにも二本松藩、三春藩、守山藩などの年貢米が積み出される一方、地元産の塩に加えて移入品として遠く阿波国（あわのくに）（現徳島県）の斎田（さいた）塩が陸揚げされ、中通りとの中継地として重要になっていきました。中之作は漁業としての機能よりも交易が盛んな様子がうかがえます。

明治30（1897）年に日本鉄道磐城線（現常磐線）が開通すると、物流の拠点としての地位を失い、にぎわいは衰えていったことから、漁業として活路を見いだしていきます。

隣には江名漁港があったことから、どうしても港湾整備は江名漁港が優先され、中之作港において本格的な整備が行われたのは昭和時代に入ってからでした。

昭和23（1948）年には、中之作港が江名港の一部として地方港湾に指定されましたが、独立を求め陳情。昭和37（1962）年には江名港から分離独立することができました。昭和40（1965）年頃からは沖合・遠洋漁業の基地として、県外他港所有の船を誘致する回船運動を積極的に行い、カツオなどの水揚基地として他県から中之作港に入ってくるようになります。

小名浜港は別として、今も他県の漁船が小規模な中之作港に水揚げしているのは、かつて交易地として機能していたことが、受け継がれているといえます。

■写真　中之作港　〔昭和30年代　磐城市観光協会発行〕